

#### 四 順徳天皇と『禁秘御抄』

##### 1 広池千九郎と『古事類苑』

今日、われわれが歴史を勉強するうえで、『古事類苑』がどれほど大きな効力を発揮しているかは、研究者たちが等しく認めている。また、その膨大な『古事類苑』を編纂するにさいして、若き日の広池千九郎博士が果たされた役割に絶大なものがあるということも、最近、学界で広く知られつつある。

ちなみに、『古事類苑』は、明治十二年（一八七九）、文部省に編纂掛を設けて以来、当代の碩学が全力を注ぎ、三十五年後の大正三年（一九一四）、神宮司庁により完成された。歴代にわたる百般の事項を天・歳時・地・神祇・帝王・官位・政治などから動物・植物・金石にいたる三十部に類別し、六国史より幕末までの基本的な文献から採録した例証を、原文に訓点（句読点・返点など）を加えて列挙した、本文一千

巻の日本版エンサイクロペディアである。

この『古事類苑』が一つの縁となつて、広池博士は明治の終わりころ、伊勢の神宮皇学館へ勤められた。その後を継いだ皇学館大学に、私も昭和四十年代に十年近く勤めたことがある。当時の学長高原美忠先生は、若い私どもにもいろいろ話をしてくださり、とりわけ学生時代の思い出として、恩師の広池博士についてよく話された。そんな関係で、私も広池博士の一端に触れる機会を得たわけである。

さて、本日は、広池博士の命日（昭和十三年六月四日没、七十二歳）にちなんで設けられた「伝統の日」である。この機会に伝統とはいかなるものか、また、その伝統を守っていくとはどういうことかを、日本の歴史に即して、具体的に考えてみたい。

##### 2 二千年近い皇室の存続

広池博士は、『古事類苑』の編纂などを通じて教えをうけた井上頼圀博士と上田萬年博士から、「日本で万世一系の皇統が二千年以上にわたつてつづいているのはなぜか、その原因を研究するように」という宿題を与えられた。以来、広池博士の大きな研究テーマは、「日本の皇室」であり、皇室の伝統が何ゆえにでき上がったのか、ど

のようにしてつづいてきたのか、ということであつたと思われる。

ところで、平成二年七月、若くして亡くなられた美和信夫先生（麗沢大学教授・モラロジー研究所員）は、私と同じく岐阜県の生まれであり、出身校も同じ名古屋大学の先輩である。そんな関係から、私の文部省在職中、無理をいって教科書調査官を引き受けていただいたこともある。その美和教授から折々に、広池博士がどういう研究をされ、どういう見解をもっておられたのか、聞かせていただくことができた。

広池博士の研究によれば、日本の皇室が二千年以上にわたってつづいた理由はいくつかあるが、何よりも皇祖天照大神をはじめ歴代の天皇が、道徳性にきわめて優れておられた、ということを通つさきに挙げている。もう一つは、歴代の天皇をはじめ一般国民が、同じ祖先につながっているという「君民同祖」の確信をもち、皇室を中心とした社会が長くつづいてきた、ということを挙げている。つまり君民同祖、皇室中心の社会構造があるからこそ、日本の皇室、日本の伝統というものがつづいてきたという結論である。

このような広池博士の結論は、数十年後の今日もほとんど揺るぎないものといつてよいであろうが、それをさらに深くわかりやすく明らかにしようとしたのが、美和教授である。その著書『天皇研究』や『歴史からの発想』（ともに広池学園出版部刊）

をみると、日本の天皇の本質、皇室が存続した理由などについて、広池博士の論旨を祖述しながら、新しい知見を加えている。

美和教授によれば、皇室の本質的な特徴と認められることは、まず第一に、祭祀を代々世襲し、敬神崇祖を励行してきたこと、また第二に、歴代の天皇が人格の涵養に努めてこられたことである。

その人格というのは、けっして一個人としての人格に止まらず、まさに国家・国民統合の象徴たるにふさわしい天皇としての人格にほかならない。具体的にいえば、仁慈の精神、公平無私の精神、そして自己反省の精神である。つまり、いつも国家・国民のために、世界・人類のために、という仁慈の御心を信条とされて、あらゆる人びとに可能なかぎり公平無私をもって接し、つねにみずからの言動を反省するよう努めてこられた。

その結果、歴代の天皇は、おのずから道徳性を高められ、多くの人びとに信頼され、敬愛の中心となってきたわけである。それが、日本の皇室の存続、さらにいつそのの繁栄を可能にしてきたのだ、という意味のことをのべておられる。